生息状況モニタリングの基本と重要性

株式会社 野生動物保護管理事務所
岸本 康誉

講演要旨

野生動物の問題が深刻化している中で、適切な野生動物管理を推進してくためには、PDCA サイクルの流れに準じた順応的管理を進めていくことが重要である。この PDCA サイクルの中で、立案した計画が適切に進められているか、また、実施した対策が効果的であったかなどを検証していく確認（C：Check）する作業の一つがモニタリング（継続監視）である。

モニタリングは、何を監視するかによって、手法が大きくことなり主な項目が以下の通りである。

・生息状況：分布の有無、生息数（生息密度）、出没・目撃頻度　など
・被害状況：農林業被害額（被害程度）、自然植生への影響、人身被害　など
・対策状況：捕獲数、出猟人日数、柵設置距離　など

また、モニタリングは、その目的によっても異なり、作業を開始するにあたって、なぜ調べるのかを明確にしていくことが重要である。モニタリングの主な目的は以下の通りである。

・現状把握：生息数の把握、被害程度の把握、捕獲数の把握　など
・目標設定：管理目標の設定、捕獲目標の設定、柵設置距離の設定　など
・効果検証：捕獲の効果検証、柵設置の効果検証　など

さらに、モニタリングの目的を明確にした上で、その設計を行うためには、「対象とする範囲」「対象とする時間」「調査の配置・密度」などを検討する必要があり、それぞれについて、留意すべき点がある。これらのモニタリングの設計には、特定鳥獣（獣類）に共通するものから獣種特有の注意点がある。

ここでは、主に、特定鳥獣のモニタリングについて、獣種共通の考え方や基本設計について説明するとともに、獣種ごとに設計する際の留意点について紹介する。